から、本校への入学は飽くまでも臨時の、しかも短期間のものだったと思われる。なお、ゾルフ大使と正木直彦とは当時日独文化協会が進めていた日本絵画展（ベルリン）開催の件で時折り接触があった。ゾルフ大使は美術愛好家で、特に浮世絵版画の蒐集に力を尽くしていた（昭和三年四月十六日『東京日日新聞』所載ゾルフ談「東洋芸術所感」）。ただし、正木の『十三松堂日記』には「〔同年〕十一月四日〔中略〕共樂倶樂部にゾルフ大使の賣立ありと聞きて見物に行く我樂多物計也」とある。

⑦ 即位御剣装飾製作

昭和三年十一月十日、昭和天皇即位礼が挙行されたが、即位御剣の装飾は本校が担当した。正木校長自らが製作監督にあたったため、彼の『十三松堂日記』にはこれに関連した記述が多い。左に主要な記述を抜粋する。

〔昭和二年〕

七月十一日　晴　出勤　松平頼平子爵來訪あり　明年御大禮に御使用可相成御卽位式御劒の拵御新調相成事に御治定　御劒は後鳥羽院勅作を御用ゐのよし　御拵の製作を美術學校に下命の事も決定せるよしを傳へらる　從來は御卽位式御劒は其都度御製作ありしか今度御新調あれは萬代不易と御治定のよしなり　夫故事は重大となるなり〔下略〕

七月十五日　晴　午前十時赤坂御所に侍從職木下書記官を訪ひ松平子爵と共に面會　木下氏より御卽位御劒拵一式を東京美術學校に委囑するよしの挨拶あり〔下略〕

七月十八日　晴　午前九時に宮内省に出頭　侍從職に於て松平頼平子爵の扱にて御寶器上皇日御座御劒を拜觀したり　こは此度御卽位御大禮行はせらるゝに付御佩用御太刀は歴朝其都度御製作なりたるを此度は帝室御傳寶後鳥羽院御製菊の御作乃太刀を日御座御劒の形式を以て裝飾し萬代不易の御儀刀と御治定相成たるにより其拵全般を美術學校に下命せられたるにより教授清水龜藏　渡邊啓三　白銀師丸尾雪太郎を伴ひて御劒を拜見す　今日は始て菊の御作を手に執りて拜觀することを得たり　正午學校にゆきて道明新兵衞を呼出して紫革帶繼平緒の製作に付き協議する所ありたり〔下略〕

八月八日　晴　宮内省侍從職に至りて日御座御劒明治大帝御佩劒を拜見す　今度製作を拜命したる御卽位御劒の參考にせん爲明也　清水　六角　渡邊諸教授　丸尾道二氏を伴ひ行きたり〔下略〕

八月二十八日　晴　日曜日　渡邊香涯氏御卽位御太刀圖案を携示す

九月八日　大雨　〔中略〕午前十時赤坂御所に參候　御卽位式御劒御拵製作の圖案を提出　一木宮内大臣　松平頼平子爵　木下事務官　甘露寺侍從　河井皇后宮大夫と協議決定す〔下略〕

十月一日　晴　出勤　午前九時より師範科手工教室中の一室を卽位御劒裝製作場と定むる爲に五條天神宮司を請して御祓を行ふ　此關係者は校長　渡邊〔香涯〕清水〔南山〕六角〔紫水〕教授　丸尾專太郎　道明新兵衞　松田權六　山崎覺太郎　福田三

郎　足立芳五郎　筒崎謙齋なり〔下略〕

〔昭和三年〕

八月二日　雨　出勤　御卽位御劒莊畧成る〔下略〕

八月十四日　〔中略〕歸宅後各社新聞記者詰掛けて當時美術學校にて謹製中の御卽位御劒の話を聞かせよといふ　一通りの經過を話したり

九月十八日　〔中略〕今日御卽位御劒の飾革の取付を終る　是にて全部出來したるなり〔下略〕

十月三日　雨　出勤　午前十時御卽位御劒上納の爲に宮內省に出頭　珍田侍從長に之を供覽し上納を終る　思召により御菓子を玉はる〔下略〕

なお、右文中、八月十四日の記者会見の結果は次のような記事となって現われた。

菊御作の御太刀を御卽位の御劍に
黃金作りの裝ひも美事に
美術學校でほゞ出來上る

古來御卽位大禮に聖上陛下が佩かせ給ふ晴れの御太刀は、日の御座の御劒を用ひさせ給ひ、特に御卽位の御劒と定まつたものとてはなかつたが、德川時代になり尊王の志篤き水戸黃門光國卿が御卽位の御劒を獻上申してからは盛儀にはこの太刀を召させ給ひ、先帝陛下にも御卽位の御儀には畏くもこの御劒を佩かせられた、しかるに大正十二年の震災にこの歷史ある御劒は高輪御殿とゝもに燒けたので今秋の御大禮には新らしく御物の中より選ばれた菊御作として名も高き、後鳥羽天皇が承久の御代に御番鍛冶に向槌を打たせ御自ら鍛へ給ふた御太刀に、黃金作りの裝ひを凝らし永劫に御一代一度の御卽位の盛儀にのみ佩かせられる御卽位の御劒とすべくその調製方を東京美術學校に御下命になつた、この光榮に欣喜した美術學校では刀劒の故實に詳しき宮內省御用掛松平賴平子爵を主任として漆工と蒔繪には同校教授六角紫水氏が助教授松田權六氏と共に奉仕、彫金には同校教授清水龜藏氏が助手福田三郎氏と白銀師の丸尾專太郎氏と共に奉仕して約一年一世一代の腕を揮つてこのほど金色の菊の御紋章十五が美しき蒔繪に輝く美事な裝を完成し、道明新兵衞氏が奉仕する紫鹿皮の御帶取に刺繡される金絲の菊の御紋が縫ひ上れればよいばかりに出來上つた、このめでたき黃金作りの御太刀は長さ二尺七寸、いとも優美なそりを持ち、鞘は金蒔繪の上に黃金の沃懸地に十五の菊の御紋章を浮かせ、同じく黃金の四花形の鍔、柄は銀鮫の柄とて金三分銀七分にて雪白の鮫皮の如く光つたこしらへである、この御太刀をつる帶取は二百枚の仔鹿の皮より十枚を選び、南部の紫紺染を百四十回繰返して漸く出來た美しい紫の鹿皮に小さな菊御紋章を金絲で刺繡したもので、九月下旬までにすべての裝ひを終つて松平子爵をはじめ一同宮中に參內して御寶藏の菊御作の太刀に取付けることゝなつてゐる、この御劒の製作に從つた人々の苦心について正木美術學校長語る

この上もない光榮ある御用命を拜してから丸一年といふもの製作に奉仕した人々はそれ〳〵名工が鏤骨の苦心を重ねましたがこ

のやうに美事に出來ましたのも皆神助によるものだといふ感が殊に深く致します、私達は後鳥羽天皇の菊御作の立派さに打たれ、これに相應しきこしらへをとて苦心に苦心を重ねました、たとへば漆にしましても由緒正しきものをとて探しましてはからず赤城山の麓の敷島村といふところの舊家に未だ一度も漆をかいたことのない大きな樹があると傳へ聞いて漆師が出かけてその主人に御太刀の話をして漆をもらつて參り、漆師の老人が生れてからこんなよい漆を見たことがないと感じたほどの漆を手に入れることができたやうな次第です、また鹿皮の紫紺染にしましても尋常ならどうしても二年を要するものですが、南部の注文先に命じて早く染め上げるやうにしました、ところが途中で十枚の鹿皮を三回染め上げたのにまだ色が出ずとてもできないと悲痛の電報が來て道明氏が驚いて南部に驅けつけて勵ましどうしてもといふことになつたのですがあまり何度も染め上げるためもう染草がなくなるといふわけで、それではと十枚の皮を四枚に減らしてそれを百四十回染め上げてやつと思ふ色ができたのでした、また黄金の菊御紋章にしても鞘が細まるにしたがつて小さくし、しかもそれが小さく見えず卵なりの鞘の上の菊花がどこから見てもまんまるに見えるやうにとの苦心などは誠に名匠の祕術を傾けたもので實に美事に出來上りまして私もほつと胸を撫で下した次第です

（昭和三年八月十六日『東京朝日新聞』）

御大礼に際して本校工芸部は、この外に東京市その他から皇室への献上品の製作（「年報」の依嘱製作の項参照）も依頼され、教官たちは忙殺された。

⑧ 新たに校旗を作る

昭和三年十二月、本校の新しい校旗が作られた。製作の経緯は次の記事に明らかである。

新に校旗を作るの記

昭和三年十二月十五日を以て東京及近縣の學生及青年團を御親閲あるべき旨仰出され本校も亦其班に列することに決するや先づ鈴川教務の心に繫りしは校旗の事なりき、御親閲に際しては其校の表示たるべき校旗の必要なることは言を待たざるがゆへなり、因りて鈴川教務は文庫に就きて之を索む、則ち明治二十三年憲法發布當時に作られし校旗にして其後絶て之を使用するの機會なくして文庫内に收藏され居るものなるが現在の文庫職員も嘗て之を見たることもなき程にて再三搜査して漸くに見出したれども扨之を檢するに其形は巾約二尺長八尺に渉り旗足二つに裂かれ表は紅色紙子裏に白繻子にて表裏共に東京美術學校の六字を小篆にて黑く縫ひ附け萠黄地小葵文の裂地にて緣を廻したる極めて堂々たるものにはあれど如何にせん當時我校の制服たりし闕掖冠帽の姿に相應して作られたるものにて現時の洋裝に適せざるのみならず街頭には架線多く行人肩磨の現代に押立行くには過重過大殊に分列行進等には全く不適當なることを知り校長、鈴川教務の具甲により其實際を檢して玆に更めて校旗を作ることを命じ實行委員として鈴川教務和田工藝部教務及渡邊啓三を指命す　之れ實に十二月